

雑感「植生の底辺をみつめる」

住職 千坂げんぼう

過日、広井良典千葉大学教授と対談をした。氏は『死生観を問いなおす』『持続可能な福祉社会』（いずれも「ちくま新書」）などで、新しい視点から様々な問題提起している中堅の学者である。

テーマは「宗教と自然」で、『現代宗教』（国際宗教研究所編、秋山書店刊）という雑誌に載せる予定という。最近では野外で自然と触れ合うのが楽しく、全く知的訓練をしていないので引き受けるのを躊躇したが、知勝院



英俊副住職と共に

の樹木葬が「亜流樹木葬墓地」とは全く異なることをPRする良い機会と考え、東京に出行いた。

話し始めると、自分より十六歳も若いなどということとは、全く関係なくなつた。また、自分の考えが相手の話に感応して、もやもやしたもの整理されてくる。特に、世俗的な倫理（生命倫理、環境倫理）と宗教的真理、仏教の自然観、日本人の自然観、山中他界観、それらを含めた価値観と時間の関わりなど様々なことがつながりを持つてくる感じになり楽しかった。

その後、神戸市で行われた自然再生の大会で、パネラーとして「久保川イーハトーブ自然再生協議会」の活動を紹介してきた。兵庫県での大会ということもあって、コウノトリと「冬みず田んぼ」による豊岡市民との共生関係が大きく取り上げられていた。豊岡市では市役所が先頭に立ってコウノトリの保護活動に取り組んでいる。そのことは、書物で知っていたが、環境教育の実践については大変参考になった。

しかし、へそ曲がりであろうか、コウノトリに関する素晴らしい事例を聞いているうちに、一閃の素晴らしい事例を聞いていた。これらも実際に肉声で体験を聞いているために発動した気概なのであろうか。

現在、絶滅危惧種となっているのは数多いが、ゴリラなど大型のは乳類が深刻な危機に陥っていることは、つとに報道で知るところである。

ゴリラ、コウノトリなどの大型生物は人間の目に触れやすいので絶滅危惧の実態は分かりやすい。過去に多くの生物を絶滅させてきた人間はようやくその原因となった先祖の行為を反省しつつある。その反省は単に生き物を絶滅させてきたという懺悔の気持ちなのではない。

食物連鎖の頂点にある人間は、生態学の深化などにより、ゴリラなどと同様に自らの生きる環境が危険になっていることに気づき始めた。人類が生き続けるには、食物連鎖の底辺にある生物を大事にしなくてはならないことが分かってきたのである。

しかし、山野草など小さい植物は数が多いというイメージがあるせいか、自分一人が盗掘しても「花泥棒は泥棒に非ず」といった自分勝手な理由で罪悪感を持たない人が多い。そのような人は往々にして金がかかるからといって、飼ひ猫の避妊手術をせず、生まれた子猫を平気で捨てる「動物愛護者」にもなる。もはや生物は「愛護」すべき存在ではなく、共生する仲間として捉えなくてはいけない時代なのになかなかである。

日本初の樹木葬は草木を人間と同様に地球上に生きる仲間と捉えている。亜流「樹木葬」は、樹木は生き物であることを無視し、墓石のように墓地使用者に樹木の管理を任せている。個人の樹木、草本類に対する「愛護」では、自然再生は実現出来ないことを知るべきであろう。